

## 『碑をけずる話』(一)

中村素堂

石農と号した後藤朝太郎先生は、長いこと日本大学の先生をしてきた。実に風変わりな人で、風貌も少し中国風のところへ、服装から帽子、持ち物までみな中国のもの。汽車や電車へ乗っても本当の中国人と思つて、誰も話しかける人もなかった、とご本人がいつていたくらい、間違つて日本へ生まれたんじゃないかと思うほどの中国愛好家であつた。

そんな風で、太平洋戦争の時などでも、遠慮なく中国礼讃をやり、軍に捕まつて随分苛められたという話だつた。

小石川の小日向台町にあつたお宅でも、玄関には支那の提灯が吊してある。客間には紫檀の机と椅子、支那茶を入れてくるという趣向で、話も自然あちらの話ばかり。

昭和十年時分、筆者は同志とともに『書と詩画』という月刊雑誌を出して、この後藤邸を訪ねたこともしばしば、その度に中国の百科全書みたいな先生の該博な知識や見聞に驚かされたり、また少々あてられ気味で僻易しながら、退却したこともあつた。

その談論風発の中には、いかにも当年の中国人かたぎが、まざまざと想察されるおもしろいものが少なくなかつた。

この間、中国へ行つてきた人から、中共の新政府でも中国人の気の長いことは依然たるものがあるね、と嘆じているのを聞いて、ふと三十年も前に石農先生が、繰り返し話された根のいい中国人を物語る一例話を思い出した。

月日も場所もうろ覚えで恐縮だが、何でも江南



(山寺歌碑)

の僻村の晩春の時節のような話でその附近に調査することがあつて通りかかった道のわきで、大きな一面の古い碑を台の上にねかせて、親子に違いない二人の男がその碑面を砥石で削りとつていたとのこと。金石の文字については人一倍関心の深い先生のこと、この隷書らしい一面の字を刻した碑面をながめると、もう大分磨り減されてよくは判らないが、漢碑とか何とかいう古いものではないらしいので安心はしたが、その削り減らす仕事のいかにものんびりしているのに感嘆して通つてきたとのことだつた。

高さ三十センチ幅二十センチ、長さ四十センチくらいという大きな砥石、その砥石の上の方の両はしに孔をあけて、三メートルほどの縄を通し、碑面には柄杓で水をかけながら、親が一方へこの重い砥石を縄で引っぱつてゆく、次には反対側にいる息子が逆に引っぱる。

大きな碑面をゆっくり歩きながら、砥石を交互に引きずり磨減させてゆくのだとのこと、一時間に二十回やれるかナ——と思つたが、それでも読みにくくなるほど字が磨り減っているのだから、大したものだと感服もしてきたとのこと。

(つづく)

〔仏教書道〕昭和四十一年